

# 「就職活動と自己の関係性」

学籍番号 12032077

和田奈保子

担当教員 立木茂雄

## 目次

### 第1章 序論

### 第2章 先行研究の展望

#### 2.1 青年期の自己の形成過程

- (1) 青年と危機
- (2) 自我同一性地位

#### 2.2 現実の社会的構成論

#### 2.3 再帰的自己論

### 第3章 調査について

#### 3.1 調査の対象

#### 3.2 調査の方法

### 第4章 結果と考察

#### 4.1 Y君の就職活動体験記

- (1) やりたいことが分からない～面接の失敗によるクライシス～
- (2) 知人の勧めで内定先の説明会へ
- (3) 就職活動の展開～自己の確立～
- (4) 将来展望とその創出プロセス

#### 4.2 Hさんの就職活動体験記

- (1) アパレル業界を目指して～モラトリアムへの突入～
- (2) 航空業界での最終面接～転機～

#### 4.3 Mさんの就職活動体験記

- (1) 就職活動当初の不安
- (2) やりたいこと探し～モラトリアム～
- (3) 将来展望の創出

#### 4.4 Sさんの就職活動体験記

- (1) 積極的将来展望と否定的将来展望
- (2) なりたい自分という将来展望

### 第5章 結論

おわりに

## 第1章 序論

「就職活動を終えて、自分が成長した」「自分が変わった」

就職活動を終えた学生からよく聞かれる言葉である。私は、自分の経験的にはそれが事実であるということが分かっていた。事実として、私自身、就職活動において様々な出会いによって世界が広がったことや、面接によって自分を表現することで以前より成長したことを感じるからである。

私はその実感を他者がどのように感じているのかを調べるために、インタビュー調査を行うことにした。そして「就職活動によって学生の自己がどのように確立されるのか」ということを自己論の視点から、具体例を用いて検証したい。

## 第2章 先行研究の展望

### 2.1 青年期の自己の形成過程

#### (1) 青年と危機

エリクソン (1950) は、内的葛藤の観点から青年期のアイデンティティについて論じている。

まず、最善のアイデンティティ感とは「自分が今どこに向かって進んでいるかがよく分かる意識」であるという。「自分はどう生きていきたいのか、どういう道を歩みたいのか」という将来への展望が拓けている時、または自らの行き先を自分で決めている時、アイデンティティが確立されているということである。また、エリクソンは大人の健全なパーソナリティの定義として M・ジャホダの定義を取り上げている。それによると、「健全なパーソナリティとは、環境を積極的に支配し、パーソナリティの統一性を示し、世界と自分自身とを正確に認識しうるようなものである」とされている。言い換えれば「自分自身と世界とを自らコントロールしている状態」ということである。

エリクソンは、このアイデンティティの確立の前に内的葛藤の経験、アイデンティティクライシス (危機、混乱) が必要であるとしている。クライシスとは、人生のいくつかの可能性のどれを選ぼうか迷い、決定しようとする葛藤と苦闘の時期のことである。すなわち、自分自身の将来への展望が拓けず、先が見えない状態のことだ。この状態においては、自分自身に対する統一感が持てず、また自分自身や自分の将来に対する信頼が持てない。ま

た、自分自身だけではなく社会に対する正しい認識を持つことができない。なぜなら、自分の中で統一された基準がないためである。このクライシスによって、崩壊した自我が、葛藤や苦悩によって再構築されていくことで、クライシス以前とは異なる、より強固で新しいアイデンティティが発生するのである。

急性のアイデンティティの混乱は、肉体的親密性、重要な職業選択、激しい競争等、心理社会的自己規定に対する同時的なコミットメントを要求している体験に自分が今さらされていると気づく時に、通常は顕在化する、とエリクソンは述べている。

つまり、将来への展望を持ち、自分の人生と社会に主体的にアプローチすることができる、健全なアイデンティティを持つには、一度は、それまでの価値観をひっくり返すような、葛藤や苦闘を伴う経験をする必要があるのである。

## (2) 自我同一性地位

エリクソンの理論を元にした、自我同一性尺度というものが存在する。早期完了、モラトリアム、アイデンティティ達成、アイデンティティ拡散の四つである。

この自我同一性地位の二つの尺度は、二つの基準によって類型化されたものである。その基準は、クライシス（危機）と、コミットメント（傾倒、自己投入、積極的関与）の二つである。このクライシスとコミットメントの有無が、どの尺度に当てはまるのかを決定する。クライシスは先に述べたように、人生のいくつかの可能性のどれを選ぼうか迷い、決定しようと苦闘している時期、葛藤と混乱の時期のことである。コミットメントは、自分の信念を明確に表現し、それに基づいて行動するという姿勢である。ここでは、この自我同一性尺度に注目していきたい。以下から、この四つの尺度について順番に説明していく。

モラトリアムとは、クライシス、つまり自我が危機に襲われている真っ最中の状態である。自分自身の存在、また自分の将来、これからどのように生きていくかどうかについて苦悩し、葛藤している。しかし、自分について悩みながらも、様々な可能性を積極的に試し、自分の将来を切り拓こうとしている状態である。つまり、混乱しながらも自分の可能性を諦めていない状態であると言える。

一方、アイデンティティ達成は、クライシスを経験し、それを乗り越えて、自己という存在を確立している。確立した後も、自分自身と自分の将来に対して積極的に関与している状態である。

アイデンティティ拡散とは、クライシスを経験した後、そのままアイデンティティを確

立することなく、自分自身についても将来についても積極的に模索することもなく、放置してしまっている状態である。つまり、自分に対する確信を持ってない、もしくは将来への展望を持たず「ただ生きている」という状態である。

最後に、早期完了とは、危機を経験しておらず、自分の生き方について積極的に関与していない状態である。分かりやすい例を挙げれば、代々店を受け継いでいる店の主人などが、これに当てはまる。このような人々は子供の頃から将来の道筋が決められており、早い時期から自分の将来を決定していると考えられる。言い換えれば、「誰かが敷いたレールをそのまま歩いて大人になった」という状態である。そのため、青年期に「自分は将来どのようにしていきたいのか、どのような人になりたいのか」という迷いや葛藤を経験していない。自我は確立されていると言えるが、アイデンティティ達成の地位に比べ、自我が弱く、惑わされやすいのが特徴である。

**自我同一性尺度（アイデンティティステータス）**

	危機	積極的関与
モラトリアム	有 危機の最中	関与しようとしている
アイデンティティ拡散	有 or 無	× 回避している
アイデンティティ達成	有	関与
早期完了	無	×

## 2.2 現実の社会的構成論

バーガー&ルックマンは、日常生活は繰り返しによって、何の疑問を持つこともなく「当たり前なもの」、として捉えられている。

彼らが説明するこの自明性の崩壊のプロセスは次の通りである。日常生活（自明なこと）が、何らかの外部要因によって崩壊するということは、今まで続いていたことができなくなった状態である。それによって、新たな自明性を主体的に創出されると言うのである。

「here and now」と「far zone」の二つの言葉によって、さらに詳しく説明されている。まず「here and now」とは、日常生活における個人の注意・関心の中で、直接関わる範囲のことである。つまり個人が影響を与えられる範囲内であり、その現実を変えうるものだという事である。

一方、「far zone」はその逆である。いつかは個人の生活にも影響を与えるものなのだが、直接の関わりがなく、関心も緊急度も低い範囲のことである。

つまり、繰り返しによって成立している日常生活は「here and now」であると言える。そして何らかの要因で自明性が崩壊し、「here and now」も破壊された場合、新たな自明性が構築される過程の中で、これまでは「far zone」だったことが、新たな自明性によって「here and now」になるのである。

### 2.3 再帰的自己論

ギデンズ（1993）が言う、再帰的關係とは主に社会科学全般における研究と研究対象との関係に見られるものである。たとえば、経済学はそもそも現実の経済を分析するための理論を構築したものであるが、実際には、経済学の理論がそのまま現実の経済にも影響を与えている。つまり「スーパーで買い物をする」という経済的行為から、経済学が発生しているだけではなく、経済学が現実の私たちの買い物という行為にも影響を与えているというのである。社会学も同じである。社会という揺れ動くものが対象であるため、そもそものような社会であるかを知るための調査そのものが、対象に変化を与えてしまうのである。

ギデンズは自己にこの再帰的關係を当てはめている。本質は過去を振り返ることそのものにある、と述べている。エリクソンの理論から分かるとおり、自己は自分を知り、主体的に自己を形成しようし、将来への展望を拓くことによって確立する。未来へと続く自己を警醒するには、過去から現在にかけての自分の行為を認識することが必要なのである。しかしギデンズは「行為は耐えざる生の流れであり、折にふれて反省したり振り返ったりする時にのみ、途切れ途切れに見えるものである」と述べている。つまり行為を

本稿では、この自己の再帰性を「自分を知るための振り返るという行為が、自己そのものに変化を生じさせるもの」と定義する。

以上の三つの理論から、自己が確立されるために必要な要因は①アイデンティティの危機を経験していること、②その際、単なる挫折や失敗ではなく、自明性の崩壊を感じ、新たな自明性の創造を行おうとしていること、③自己を振り返ることで、将来展望を創出しようとしていること、の三つが挙げられる。

## 第3章 調査について

### 3.1 調査の対象

就職活動を終えた、もしくは就職活動を継続中である同志社大学の4回生。以下の4人に協力をしてもらった。Y君(生命保険会社内定)、Hさん(航空業界志望で就職活動中)、Mさん(人材サービス業界志望で就職活動中)、Sさん(Web制作・マーケティング会社内定)である。()内はいずれも調査当時のものである。

### 3.2 調査の方法

一人当たり約一時間半のインタビューを行った。学生生活での体験や心情、就職活動について、そして将来展望について自由に語ってもらう形式を取った。

## 第4章 結果と考察

先行研究から、自己の確立に必要な要因として「アイデンティティの危機の経験」「自明性の崩壊を感じている点」「自己を振り返り、将来展望を創出しようとしていること」の三つを挙げた。この章では、この三つの観点から、四人のインタビューを見ていく。

### 4.1 Y君(生命保険会社に内定)の就職活動体験記

#### (1) やりたいことが分からない～面接での失敗によるクライシス～

「最初はテレビ局を受けてた。最初、一番エントリーが早かった一社だけエントリーシートを出してん。それが十一月。それから年明けまで何もなかった。一月第一週とか締め切りやったから。テレビ局は『単純にテレビが好きやったから』っていう理由で受けた感じ。しかもテレビ局は試験が早いやんか。お試しで受ける人も多いやん。エントリーシートだけ出すとか。だから皆受けてるし自分の受けようっていう、そういうのもあった。一時期、司法試験を受けようと思ってた時があって、その時に、一時だけテレビ局も面白そうと思ったことはある。でも、それはそこまでは自分の中では大きな位置は占めへんかったわ。だから、テレビ局は行けたらちょっとでも面接進んで、色んな話聞けたらいいなぐらいに思ってた。だから、本気でメディアを志望してる人と俺では、情熱が違う。一回テレビ局に見学に行ったのは面白かった。それで、ちょっとモチベーション上がったって